

方」とは何よりもマグレブからインドに及ぶイスラム世界を意味しており、フィトラトはここでイスラム文明の榮光と衰退、ヨーロッパ帝國主義 (Jiangrik) の植民地と化したイスラム世界の慘狀、第一次世界大戰後の「東方」をめぐる國際情勢、そして解放の條件としての「東方の統一」とソビエト政權との共闘の意味を明快に論じている。『東方政策』は、たしかに革命期に特有な宣傳文書の一つではあるが、その中にはガスプリンスキーやアブデュルレジト・イブラヒムら、ロシアにおけるイスラム改革主義の先達の論理と精神が繼承され、またソビエト政權に對する自立的な立場が示されていることは注目値する。この小冊子もまた、トルキスタン人フィトラトの肖像を描くには有用な史料となるであらう。

イブン・ジャマールアの教育論

——中世のイスラーム教育のあり方から見る
ウラマーの社會的地位の變化——

湯 川 武

本發表でとりあげるイブン・ジャマールアは、マムルーク朝時代前半を代表する高名な法學者であり、長年にわたってマムルーク朝支配下のエジプトのシャフイー法學派の大カーデーイ (法官) を勤めた人物である。有名な政治論をはじめとして、彼には多くの著作があるが、ここではマドラサ (イスラーム法を中心に教育する學校) における教師と學生のあり方を論じた *Tadhkirat al-sami'* と

いう教育論の著作を通じて、ウラマー (イスラームの學者・知識人) がどのように養成されていたかを検討することとする。

Tadhkirat を一讀して感じられることは、教える側にも教えられる側にも、かなり形式主義的な作法が求められていたということである。教師と學生のあるべき姿は、さまざまな面で捉えうるが、イブン・ジャマールアはもっぱら外面的なことや技術的なところに關心を集中しており、知的關心の廣がりとか深化をどのように計るかについては、ほとんど言及していない。

このイブン・ジャマールアの著作の検討からさらに進んで、この時代のイスラームの學問やウラマーのあり方も検討する。高いレベルの教育についての議論において、學問の内容や教育の本質論よりも、このような外面的形式的な事柄が先行することは、當時の學問のあり方、そしてウラマーのあり方自體が形式化し硬直したものになりつつあったことを反映していると考えられる。

辛亥革命と蘇州農村

夏 井 春 喜

近年、中國の資本主義的發展、ブルジョアジーの成長等の「都市」的側面からの辛亥革命研究が行われ、その意義が高く評價されている。辛亥革命が農村において如何なる變化をもたらしたのか。

本報告は、租稅簿冊資料及び新聞記事等の文獻資料に基づいて、辛亥革命時期の江南蘇州農村の地主——小作關係の變化を具體的に解明